

被爆体験・生活記録・山代巴

宇野田尚哉

近年、鶴見和子文庫（京都文教大学図書館）の整理・公開が進みつつあることも連動して、戦後の生活記録運動への関心が高まりつつある（たとえば、西川・杉本二〇〇九、猿山二〇一一、西川二〇一二など）。そのことも踏まえつつ、〈被爆体験と生活記録〉というテーマについて考えてみるなら、そのときまず想起されてくるのは、「長崎生活をつづる会」のことであるだろう。鶴見和子を中心とする「生活をつづる会」の重要な担い手の一人で、東京の主婦からなる「ひなたグループ」のリーダーだった牧瀬菊枝は、鶴見和子と共同編集した「生活をつづる会」三冊目の単行本『ひき裂かれて―母の戦争体験』（筑摩書房、一九五九年）に寄せた「ひなたグループの歩み―戦争体験を書いた母たち」のなかで、「長崎生活をつづる会」とも関わって、次のように述べている。

（ひなたグループのある書き手が、戦争体験の生活記録を書いたものの、「逆コースの波がひしひしと感じられ」るなか、その文章を文集に載せることをためらうようになった。そこで、グループ内で話し合いが持たれ、結局この文章はペンネームで文集に載せることになった―丸括弧内引用者注、以下同じ）。この話し

あいのあと、長崎（生活をつづる会）から（上京して）きた人は「四年もやっているのに、ひなたグループはずいぶんぬるい」とあきれた顔であった。が、わたしたちのグループの構成メンバーから考えれば、ぬるいといわれても、こういう歩き方しかできない。長崎は原爆問題をかかえているうえに、諫早の水害もあり、行動的にならざるにせまられ、政治的に高まったのであるし、わたしたちのなかには、行動的には腰のおもい人が多いのだから当然なのだ（二二二頁）。

ここからは、「長崎生活をつづる会」が「生活をつづる会」のなかでもとくに意識の高いグループであると捉えられていたことがうかがわれる。実際、生活をつづる会『おかあさんと生活綴方』（百合出版、一九五七年）は、第四章「書くこと」によってどう変わったか」第四節「大きな広がりのおかげ」の第三項「原水爆禁止世界大会」に木下澄子「被爆者とともに」、渡辺千恵子「原水爆禁止世界大会に出席して」を収録して、大きく紹介している（鶴見和子と渡辺千恵子の出会いについては後掲の渡辺の著作参照。鶴見和子文庫には渡辺から鶴見に贈られた自著が複数所蔵されている）。

「長崎生活をつづる会」が論じられる際には、「長崎の証言の会」への展開という文脈で論じられることが多いように思われるが（たとえば、『時代を生きて』刊行会二〇〇六、東村二〇一二、東村二〇一四など）、「生活をつづる会」あるいは生活記録運動全体のなかでの「長崎生活をつづる会」の特質や達成についてももつと注意が払われてしかるべきであろう。

ところで、「長崎生活をつづる会」に見られるような私たちでの被爆体験と生活記録との結びつきは、広島においても見られるのだろうか。管見の限り、後述する山代巴周辺の事例を別にする、ほとんど見られないように思われる。言うまでもなく、広島でも被爆体験の手記集・証言集は数多く編まれているわけであるが、そこに生活記録運動の文脈を見出しにくいという点は、長崎と比べた場合の広島の特質であると言ってよいかもしれない。

そういう意味では、「地方の会」発行の雑誌『私と私のまわり記録 地方』（以下「記録 地方」と略称。誌名は表紙による。奥付の誌名は「地方」だが、「地方の会」は「記録 地方」発行に先立って「地方」という雑誌を発行しており、紛らわしいので、ここでは「記録 地方」とする）の第一号（一九六二年二月）・第二号（一九六三年六月）が、「生活記録」欄で「被爆十七年を生きる」という小特集を組み、和田ヨシ子「原爆被害と失対打ち切り」、加藤淳子「山田さんの話」、内田千寿子「原爆投下直後のこと」、渡辺藤子「被爆者の生活記録」という四編の生活記録を掲載していることが注目される。「地方の会」の中心は重家豊、『記録 地方』の編集人は山代巴であった。

一九五二年に峠三吉が病に倒れ、彼の周りに結集した若い学生

たちによって担われていた広島運動が危機に陥った際、助力を求めた先は、新日本文学会広島支部の備後地方の有力メンバーたち、すなわち、府中の山代巴、三原の重家豊、尾道の城間功順らであった。結局このうちの山代巴が広島に滞在し、『原子雲の下より』（原爆の詩編纂委員会編、青木書店、一九五二年）や『原爆に生きて』（原爆被害者の手記編纂委員会編、三一書房、一九五三年）の編纂を助けたことは、周知の通りである。『記録 地方』の基盤にあつたのは、敗戦後間もない時期以来の備後地方の文化運動の山代・重家・城間らを担い手とするこのようなネットワークにほかならない。そういう意味では、「地方の会」の運動は、狭い意味での広島（広島市とその周辺）の運動ではなく、備後地方（広島県東部）の運動であつたと捉えるほうが、適切であろう。

じつのところ、前述した特集にも、山代巴が備後で取り組んできた文化運動の成果が反映されている。敗戦後間もない時期から備後の農村でとくに女性を対象とする文化運動に取り組んできた山代巴は、一九五九年に数人の女性を結集して「たんぽぽ」グループという勉強会を組織する。山代巴らが本格的に生活記録運動と出会つたのは、そこで講師をつとめた中野清一が刊行されたばかりの『ひき裂かれて』（前出）を紹介したことによつてであつたようである。六一年に山代巴が備後を離れると、このグループは備後読書サークル協議会に合流してその機関誌『みちづれ』『みちづれニュース』に寄稿するようになるが、『記録 地方』の前述の特集のうち、かつて「たんぽぽ」グループのメンバーだった内田千寿子の生活記録「原爆投下直後のこと」は、『みちづれ』から転載された原稿であつた。この文章は、のちに内田の文章がま

とめられて『叢書・民話を生む人びと』一九四五年八月からの出発』（而立書房、一九七七年、山代巴解説）として刊行される際には、その巻頭に置かれることになる。すくなくともこの内田の文章に関するかぎり、それが山代巴の影響下で書かれたものであることははっきりしている。当時山代巴は備後地方の文化運動のなかでそのような影響力を持っていたからこそ、『記録 地方』創刊の時点ではすでに備後を離れていたにもかかわらず、同誌の編集人に据えられたのだと考えられる（ただし、中ソ対立と連動した路線対立により、山代巴と重家豊は政治的に分岐し、山代は本誌三号、月報六号をもって『記録 地方』の編集人を降りることになる。結果的に『記録 地方』はそれと同時に停刊となったようである）。

以上のように見てくると、この小稿の限られた文脈のなかだけでも、検討されねばならない課題がいくつも出てくる。たとえば、「生活をつづる会」あるいは生活記録運動全体のなかでの「長崎生活をつづる会」の特質や達成、広島運動と備後の運動との関係、備後の運動とその主要な担い手たち（山代巴・重家豊・城間功順ら）の特質、備後の生活記録運動の特質とそこでの被爆体験の比重、など。最後の点に関わって言えば、備後の生活記録運動において被爆体験は数あるテーマのうちの一つに過ぎず、分析する側がそこに関心を集中しすぎると備後の生活記録運動の全体像を見誤ってしまうことになるであろうが、農村部から動員されて被爆した人も多かったこの地域の生活記録運動のなかでこのようなテーマが設定されているということは、おさえおくべき点であると思われる。

（被爆体験と生活記録）という観点から長崎と広島を対比して

みようという着想から書き始めたこの小稿は、期せずして、生活記録運動を含む備後の文化運動の分析の必要性という結論に落ち着いたようである。さいわいなことに、山代巴も重家豊も、膨大な量の資料を遺してくれている。今後の課題としたい。

参考文献

内田千寿子 一九七七 『叢書・民話を生む人びと』一九四五年八月からの出発』而立書房

神田三亀男 一九九七 『山代巴と民話を生む女性たち』広島地域文化研究所

原爆の詩編纂委員会編 一九五二 『原子雲の下より』青木書店

原爆被害者の手記編纂委員会編 一九五三 『原爆に生きて』三一書房

小坂裕子 二〇〇四 『山代巴―中国山地に女の沈黙を破って』家族社

佐々木暁美 二〇〇五 『秋の蝶を生きる―山代巴 平和への模索』山代

巴研究会

猿山隆子 二〇一〇 『鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展

開―「生活をつづる会」における話し合いの記録ノート』分析から』

『京都大学大学院教育学研究科紀要』五七

『時代を生きて』刊行会編刊 二〇〇六 『時代を生きて―文集・鎌田定夫』

生活をつづる会 一九五七 『おかあさんと生活綴方』百合出版

瀬戸口千枝 一九五九 『熱い骨』長崎生活をつづる会

辻智子 一九九八 『農村で女が「生活を書く」ということ―一九四五〜

一九六〇年代の生活記録運動から』『国立婦人教育会館研究紀要』

鶴見和子・牧瀬菊枝編 一九五九 『ひき裂かれて』 筑摩書房

長崎生活をつづる会編刊 一九六二 『生活をつづる』 第五集「木下澄子特集」

長崎生活をつづる会編刊 一九六五 『生活をつづる』 第六集「戦後二十年」特集

西川祐子 二〇二二 「サークル運動再考―鶴見和子文庫から」、安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史3 社会を問う人びと―運動のなかの個と共同性』岩波書店

西川祐子・杉本星子編 二〇〇九 『共同研究 戦後の生活記録に学ぶ―鶴見和子文庫との対話・未来への通信』日本図書センター

東村岳史 二〇二二 「生活記録」から「証言」へ―「長崎の証言の会」創設期と鎌田定夫』『原爆文学研究』一一

東村岳史 二〇一四 「被爆（者）体験と生活記録―一九七〇年代までの長崎における文字記録と写真記録」『Quadrant』（東京外国語大学

海外事情研究所）一六
広島市職員労働組合編刊 一九八四 『重家豊資料目録―広島県社会・労働・文化運動史料』

福田須磨子 一九五八 『原子野』 現代社

福田須磨子 一九六八 『われなお生きてあり』 筑摩書房
福田須磨子著／長崎の証言の会編 一九八九 『長崎の証言双書―原子野に生きる 福田須磨子集』 汐文社

山代巴 一九九一 『山代巴文庫第二期五 民話を生む人びと』 径書房

渡辺千恵子 一九七三 『長崎に生きる』 新日本出版社
渡辺千恵子 一九八七 『長崎よ、誓いの火よ』 草の根出版会

付記

本稿は、山代巴記念室所蔵「山代巴資料」、広島大学文書館所蔵「山代巴関係文書」、広島市公文書館所蔵「重家豊資料」などを調査する過程で考えたことの一端を、とりあえず研究ノートのかたちにとめてみたものである。山代巴文学研究所の渡邊健次さんをはじめ、調査の過程でお世話になった方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。なお、「長崎生活を記録する会」については、まだ鶴見和子文庫所蔵の関係資料を若干閲覧した程度で、すべてが今後の課題であり、重要な先行研究の見落としや事実関係の誤認などもあることと思う。ご教示を乞う次第である。